

垂井出身の川上さん「若手・女性技術者活躍大賞」

未知の世界進み輝く



女性の少ない建設現場で働く川上さん。志望とは違う道へ進んだが、3年目の今はやりがいを感じている＝川崎市で（本人提供）

建設技術者の人材派遣会社に勤務する垂井町出身の川上真由美さん（28）＝東京都＝が、建設業界で活躍する女性に贈られる「若手・女性技術者活躍大賞」を受賞した。コロナ禍で志望していた業界に就職できず、思ってもみなかった業界に進んで建設現場で汗をかいた川上さん。まだまだ女性の少ない業界だが、「後進の目標となる存在になりたい」と力を込める。

「後進の目標になりたい」

若手・女性技術者活躍大賞は、都魅力ある建設事業推進協議会（CCI東京）の主催で、川上さんは昨年度に受賞した。

建設技術者の川上さんは、理系だったわけではない。大垣東高校から静岡大人文社会科学部へ進学。米国文学を専攻し、「ずっとお城で暮らしてる」など知られる作家シャーリー・ジャクソンを研究していた。就職活動では文化芸術系の仕事を探したが、コロナ禍で希望の会社が採用を停止。そこで立ち止まり、進む道を再考した。

（大沢悠）

三学年下の弟だった。勉強は得意だが周囲となじめなかった弟は、高専に進むと喜んで通学した。「人は合っている環境にいれば、生きやすくなる」。そして、「人には適材適所がある。楽しく働ける場所に人を導きたい」との思いを抱く。

見つけた答えが、人材業者。建設現場に人材を送り込む「ウィルオブ・コンストラクション」（東京）への入社が決まった。一年前から工事現場へ出向き、現場作業員に指示を出す役割を担った。現場は男性ばかり。建設現場未経験の川上さんは指示を聞いて

てもらえないこともあった。重いものを運んだり、高い所の物を取ったりすることも一人でできず、「男性だったら一人でできることも人に頼らないといけない」としよげた。専門用語を学んだり、作業手順を読み込んだりして、適切なタイミングで分

かりやすく指示を出すように心掛けた。工事全体の流れを把握し、重機の配置を自身で考えることなどで、的確な指示が出せるようになった。すると、作業員も素直に従うようになった。当初は「何でこんなつらい思いをしないといけないのか」と嘆くことも多かったが、入社三年目のいまでは、「やればできるんだ」と自信も芽生えてきた。川上さんは、「これから入ってくる女性や若手に『あのようになりたい』と思われる存在じゃないといけない」と意気込む。故郷の若者には「岐阜は良くも悪くも閉鎖的。違う世界を一度は体験してほしい」と呼びかける。

女性割合は微増 建設業界、就職支援や魅力PR

国土交通省が二〇二一年に大手建設業者五十三社を対象に行った建設業活動実態調査の結果では、工事の設計や積算、現場施工の管理監督、技術系営業などに当たる技術職の従業者数の男女割合は、男性が93・9%を占め、女性は6・1%にとどまる。技能職（現場労働者）ではさらに女性の割合が低く、1・4%だった。

〇一年の同調査では、技術職の女性の割合は2・2%、技能職は0・5%。一一年は、技術職3・5%、技能職0・09%で、男女比率の差は依然大きいものの、女性の割合は徐々に増加傾向にある。

日本建設業連合会は、建設業で働く女性の活躍を後押しするため、二〇年度から五年間で推進する「けんせつ小町活躍推進計画」を策定し、就職支援などを展開している。

川上さんが受賞した若手・女性技術者活躍大賞も、多様な人材を確保するためにイメージアップや地位向上を狙ったものだ。主催者で、国や自治体などをつくる「東京都魅力ある建設事業推進協議会（CCI東京）」事務局は「若手や女性に、建設業に就職しようと思ってもらえるよう、建設業の魅力を発信していきたい」と話す。